

2025年1月15日(水)

ウルフ ムーン Wolf Moon の頃

14日の夕方5時半過ぎた頃、校舎から見上げた東の空には、満月とそのすぐ上にオレンジ色の火星が輝いていました。6時頃には、月のさらに右上にオリオン座の三つ星、1等星のベテルギウスやリゲルが、またおうし座の1等星アルデバラン、こいぬ座のプロキオンも確認でき、空気の乾燥した夜空



2025年1月14日 18:00 月と火星

に「冬の大三角形」を描くこともできました。

ところで、太陰暦によって生活していた北アメリカ大陸の先住民たちは年に12回巡ってくる満月について、それぞれ名前をつけていました。昨日のように新年の最初にやってくる満月を「ウルフ ムーン」と呼んでいたそうです。それは、この季節がオオカミ（タイリクオオカミ、ハイイロオオカミと呼ばれる *Canis lupus*）にとっては繁殖期に当たり、餌を求めたりして遠吠えをすることに因んだと伝えられています。ただ、現在の動物社会学では、オオカミの遠吠えはコミュニケーションや狩猟行動による社会性のためと考えられています。

今日のアメリカ合衆国では、国土の開発によってオオカミたちの生息域は大きく制約され、一部の限られた地域でしか観察することができません。こうしたアメリカ大陸におけるオオカミと人間との相克については、ぜひ『シートン動物記』を読んでみてください。因みに、わが国では1905年に死亡したのを最後にニホンオオカミは確認されていません。

ヨーロッパのケルト系民族では、1月の満月を「スティ ホーム ムーン Stay Home Moon」と呼び、寒い冬には家の中で過ごすものだと論じています。同じ北ヨーロッパでも、アングロサクソン系民族では冬至の後に訪れる最初の満月という意味で、「ユール後の月 Moon After Yule」と呼んだりもします。同じ月を眺めても、時代や民族、地域によって異なるのは面白いものです。なお、北アメリカの先住民は2月の満月を「スノームーン Snow Moon」と呼ぶそうです。

参考図書

アーネスト T.シートン、今泉 吉晴訳・解説(2010)『シートン動物記 オオカミ王ロボ』童心社、176頁。

石飛 一吉